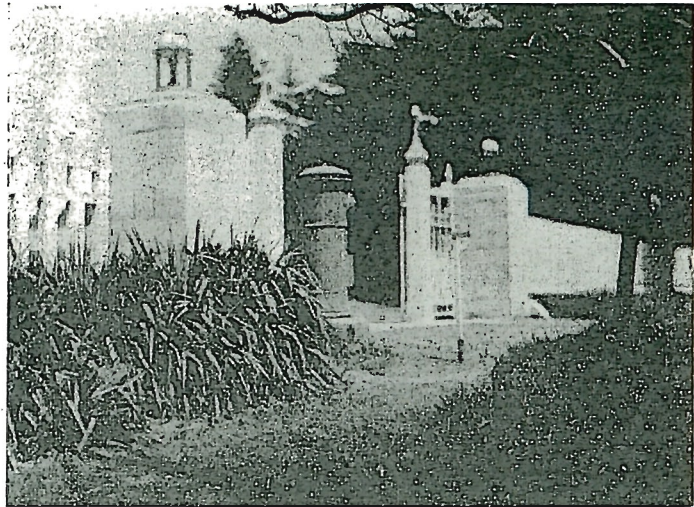


六 門札とポスト

漱石の所謂「いかめしき門を這れば蕎麥の花」の堂々たる正門を這入つて、同じく漱石の「粟みのる畑を借し

會ては不思議の一



て敷地なり」の校舎に向つて進み、右に東光原、左にプールと檜の森とに挟まれてゐる道を通つて、肅酒たる中門と東西に通用門も開いてゐるのに、その何れにも校札を懸けないことも、本校特徴の一つで、曾ては七不思議の一つに數へられてゐた。小さなことではあるが、この際その由來を明かにして置きたいと、色々調査して見たが、古城時代や第五高等中學校時代に懸けてあつたか否かは判然しない。然るに改稱後一時は確かに懸けてあつたことが、寫眞に示す通りである。記録を案するに、三十年七月十日の起案には、次の如く記してある。

校札ハ最早朽廢ニ付今般夏期休業ト共ニ御廢止相成候テ可然哉此段相伺候也

右の起案は、即日許可を得、十一日を期して遂に廢棄して了つたものである。而して文中朽廢云々とあれば、相當の

校札の廢棄

年數を経過してゐた筈ではあるが、改稱後僅に三年にして朽廢するものだらうか。掲げて置いた校札は、廢棄前のものとも考へられず、且その後に入學した人々の中には、懸けてあつたやうにも記憶することとであれば、廢止は取替の意味だらうか。新調の記録もなく、依然として不可解である。寫眞の裏には、正門より教室を望むと書いてあるが、門内の櫻も見えないのは、櫻の樹はその後植付けたものであることだけは確かである。工學部もなかつた頃なので、今と異つて、正門の前より充分に撮影することが出来たものと見える。

ポスト設立年月

中門外の西側に立てられてゐる郵便ポストも、その頃より始まつたものである。三十二年三月九日、生徒課より生徒宛揭示したものに、

ポスト設立

今般本校中門西側にポスト設置候ニ付今後寮生ノ書狀各自該ポストニ投函スルヘシの記録が遺つてゐる。在寮生は、二十二年移轉以來、既に滿十箇年の長い間、不便を忍んで來たわけである。

七 カッター來る

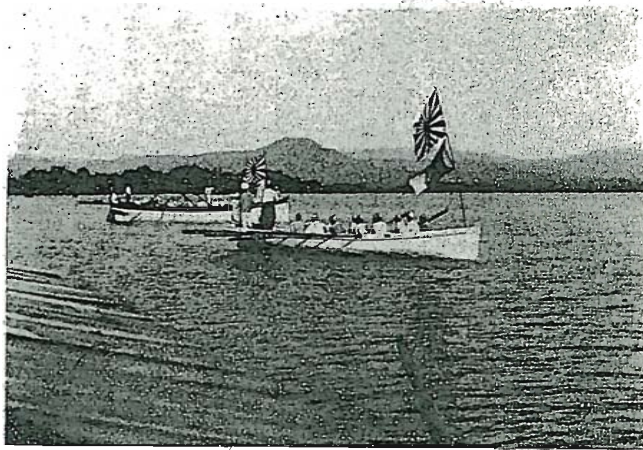
明治二十八年を以て端艇會の成立を見た本校には、翌二十九年の早春、新艇の進水式も行はれ、三十年の春には、第二回の端艇會が舉行せられた。然るに三十年、本校は、佐世保鎮守府より、日清戰爭の戦利品たる十餘艘を官公私立の學校に譲與すべき由を聞き、鎮遠號艦載のカッター二艘を譲受けた。その経緯はかうである。本校長は、六月十二日付を以て、該鎮守府長官宛、左の如き照會を爲した。

譲與の照會

十四號 パーヂ 一艘 (長三十三尺 幅八尺五寸)

カッターの構造

右貴府收容端艇本校生徒操艇術練習之爲メ備じ度候ニ付御差支無之候ハ、御讓與相成度此段及御照會候也
正確に記せば、バーヂの方は、長さ三十四呎四吋、幅八呎四吋、深き四呎八吋、積量二千立方呎強、オレゴン・



(順旅は後、連大は前) - タツカの上 湖壺

パイン製、ギグの方は、長さ三十一呎、幅六呎十吋、深き三呎二吋、(積量不明)、ティク材製であつた。而してその希望は達せられたが、バーヂの方は、帆その他調製する必要があつたけれども、その製式等不明に付、廻航の爲佐世保に滞留中の生徒富田定壽・吉田久太郎兩人へ指圖を乞ふ旨の依頼状を出し、七月末までに佐世保町宇濱田町海岸通船繋留場に於て修理を施し、前者には旅順、後者には大連と命名、八月二日、一旦百貫港に廻送の上、三日、百貫港を發し、四日、無事江津湖に安着した。廻漕の際には、握飯二籠、菓子類四箱、梨及び鶏卵數十箇、寶丹數袋、飲料水十餘瓶、照前燈四箇、蠟燭數斤等を備へ、本校生徒十六名の外、元本校生徒一名、商船學校生徒二名、攻玉社生徒一名、濟々巽生徒五名、數學院及び鵬翼舎生徒五名、凡て三十名の青年が、非常なる意氣込を以

旅須・大連と命名
廻漕の概況

て漕いで來たもので、所載の寫眞は、當時の本校生徒の一人たる永村清氏の寄贈に係るものである。

カッター
姿を消す

かくて旅順・大連の二艘は、その後永く異様を江津湖上に留め、ボート・レースの際などにも使用されてゐたのであるが、何時の間にか姿を消して了つた。やがてそのことが時折生徒間の噂に上るやうになつたが、はからずも大正二年度龍南會新委員選舉場裡に於て表面化して、大問題を惹起したのである。けれども、その間の消息を漏すことは、色々の方面に差障りもあるので、同年三月十五日發行の第四百九十九號所載「龍南の春は未だ來らず」吾人の見たる端艇事件」に譲ることにしたい。

八 私 的 の 諸 會

既記の諸會

本校部の龍南會、醫學部の研瑤會、工學部の工友會を公的のものとすれば、此等に對する私的のものとして、龍南會成立の過程たる金蘭會・研志會・擊劍會・土曜會や、九州史談會・中堅會等に就いては既に記した。而して歴史に於て古く、今日に及んでゐるものには、熊本高等學校基督教青年會(一名花陵會、後、第五高等學校青年會花陵會と改む)と、大日本佛教青年會熊本支部(後の五高佛教青年會)とがある。その他、硯友會・有終會・紫溟吟社・紅葉會・少詩會・泰東會・白雨會・二葉會・青柳會・龍南短歌會・白路社・社會科學研究會・エスベラント會・東光會・童話會・科學同好會・映畫同好會・哲學研究會・蒼龍社・吟詠會・洗心會等、數へ來れば流石に五十年の間には、時代と好尚とに従つて、色々の會が生滅隆替した。而して之が調査研究は、龍南精神運動史上から見ても、相當興味あることではあるが、凡てを網羅詳述することは、本書編纂の第一義とするわけでもないので、龍南會雜誌を通覽する間に見出したものの中、特色あるもののみ就いて、略記することにし